

『封神演義』に見える宿命と情義の衝突

岩崎華奈子

一 問題の所在

『封神演義』（以下『封神』と略稱）は殷周革命に題材を取り、神仙妖怪が大亂闘を繰り広げる神魔小説である。かつて魯迅はこの小説を、「商周の争いに假託し、幻想を描いたに過ぎ」ず、その文學性は『西遊記』・『水滸傳』に及ばないと評した¹⁾。『封神』に對する一般的認識は今日でもほとんど變わっていない。

この小説の最たる特色として注目を集める神仙妖怪の活躍は、當然ながら史實として記録されてはいない虚構である。但し正史以外の様々な説話や傳承において、殷周革命と神魔要素との融合は『封神』の成立以前より行われていた。例えば、各種の道教資料には武王伐紂に應じて玄天上帝が妖魔討伐を行う故事が見え、また『封神』の先行作品として知られる元至治年間刊行の『全相平話武王伐紂書』（以下『平話』と略稱）にも、神仙や不思議な能力を持つ人物が複数登場している。では殷周革命と神魔とを扱う小説としての『封神』の新奇性はどこにあるのか。まず登場する神仙妖怪の数が格段に増え、闡教と截教という架空の二派閥が設定されていることが挙げられる。闡教は周を、

『封神演義』に見える宿命と情義の衝突

截教は殷を支援しており、これは周對殷という人間の對立に應じて設定されたものであろう。また宿命論（あらゆる出來事を宿命に歸結させる觀念）の多用が指摘されており、これが『封神』の文學的評價を著しく低下させる一因となっている⁴⁾。

このような多量の神仙と宿命論の導入は、傳統的な殷周革命故事にどのような變化をもたらしたのだろうか。また、それは『封神』を如何なる小説として成就させたのか。従来の研究では主に成立過程や神魔要素の來源に關心が寄せられてきたが、本稿は宿命論と神仙が『封神』にもたらした文學的效能について考察を行う。これを通して神魔小説としての評價の翳に隠された、この小説のもう一つの側面を炙り出すことを目的とするものである。

二 『封神』の宿命論の特徴

『封神』には「天數」「天意」「天命」「氣數」といった「天」「命」「數」等の文字を用いて宿命を意味する語彙が頻出する。例えば「成湯望氣黯然、當失天下。鳳鳴岐山、西周已生聖主。天意已定、氣數使然（成湯の氣は黯然としており、天下を失うであろう。鳳凰が岐山に鳴

き、西周には聖君主が生まれている。天意は定まり、運命がそうさせるのである」〔第一回〕（傍點筆者。以下同）、また「此時成湯合滅、周室當興。又逢神仙犯戒、元始封神、姜子牙享將相之福、恰逢其數、非是偶然（このとき成湯は滅ぶべき定めであり、周室が興ることになっていた。また神仙が戒律を犯し、元始天尊が封神を行つて、姜子牙が文武の榮譽を受けることは、ちょうどそのような命運に巡り合わせたのであり、偶然ではない）」〔第一五回〕といった言い回しが作中に散見され、小説の結末を、天の意思によつて豫め定められ、一切變更することの出来ない宿命として度々明示している。

但しこうした語彙も、發話者によつて性質が異なる點に留意せねばならない。具體的には、主觀に基づく豫想や感慨を述べている場合と、事態の結末についての豫言として發せられる場合とがある。例えば、殷の武將黃飛虎が一族を引き連れ周へ出奔する際、妖術を使う敵に遭遇し、父黃滾が絶體絶命を「此正天數難逃、吾命所該（まさに天數は逃れがたく、私はこうなる定めだったのだ）」〔第三三回〕と嘆く。だが黃一族は結果的にこの危機を脱し、無事に周まで辿り着く。黃滾の嘆きは彼の主觀による悲觀的豫測に過ぎず、その後のストーリー展開に直接關與するものではない。

しかし、次の例はこれと異なる。

太姜曰、「我兒、爲母與你演先天數、你有七年災難。」姬昌跪下答曰、「今日天子詔至、孩兒隨演先天數、內有不祥七載罪愆、不能絕命。」

（太姜が「我が子よ、母はお前のために今後の天數を占つてみたが、お前には七年の災難が降りかかるだろう」と言うと、姬昌は跪いて答えた。

「今日天子の詔敕が届き、私も天數を占いました。不吉な七年の禍があります

ますが、命を落とすことはありません。」〔第一〇回〕

太姜は周文王姬昌の母である。『封神』では彼ら母子が占術に長け、未來を正確に豫知出来る人物として描かれている。この占卜のとおり、姬昌は殷に赴いて七年軟禁された後、許されて歸郷を果たす。また次の例は燃燈道人という闡教の仙人が、敵陣を破る武將を指名する際のせりふである。

燃燈嘆曰、「天數已定、萬物難逃。」就命方弼破風吼陣走一遭。

（燃燈道人は「天數は既に定まり、何物も逃れがたい」と嘆き、方弼に風吼陣を破るよう命じた。）〔第四六回〕

結果的に方弼は陣を破ることが出来ずに死亡する。燃燈道人の「天數已定、萬物難逃」という言葉は、方弼の出陣だけでなく、彼が陣破りに失敗して戦死する結末までも豫言するものである。

このように、神仙や占卜を能くする者が、未だ發生・完了していない出來事に關して述べる場合、それは主觀ではなく實現性の高い豫言となるのである。

また豫知能力を持つ登場人物の發言は、既に發生した出來事の不可避性を強調することもある。次の例は、元始天尊（道教の最高神格。『封神』中では闡教の領袖）が、ある仙女の戦死を嘆くせりふである。

「方纔絶者乃是瑤池金母之女。天數合該如此、可見非人力所爲。」（「今し方死んだのは瑤池金母の娘だ。天數はこうなるように決まっています、人の力ではどうにもならぬことがわかる。」）〔第八三回〕

もしこれが神仙ではない一般の人間が發したせりふであつたなら、「天數」は仙女の死に對する主觀的感嘆を表現するものではない。

元始天尊によつて語られるからこそ、この言葉は彼女の死を宿命とする絶対性を帯びるのである。

『封神』では、主觀的な宿命論よりも、このような神仙の語る宿命

論、すなわち既に決定された不可避の結末を宣言するせりふが壓倒的に多く、加えて地の文や詩詞・韻文等に見える宿命論的敘述も枚擧に暇がない。地の文や挿入詩詞等は、語り手や後世の人間といった物語の外部に在つて故事の結末や歴史を知る者が述べるものであるから、その宿命論は當然豫言性・絶對性を帯びることになる。

かかる不可避の宿命論は、物語を確實に進行させる強力かつ都合の良い装置として機能する。革命の成功や封神儀式といった本小説の重要な結末をはじめ、登場人物の生死や言動に至るまで、あらゆる出来事は宿命として宣言しさえすれば、途中如何なる経緯を辿つたとしても、決して違えることなく實現させることが出来る。翻つて見れば、宿命論が豫定する結末への着地を擔保することで、従來の殷周革命故事には無かつたエピソードの挿入や物語展開の改變が容易になつたと言えよう。

このように『封神』における宿命論の強烈な存在感は、宿命を表現する語彙が頻出することに加え、神仙が多數登場し、彼らがこれに豫言性・絶對性を付與していることに起因する。そしてこの宿命論と神仙とが、行き着くべき結末に向けて強制的に物語を推進することで、『封神』は従來の殷周革命故事とは異なる、新たな物語を作り出しているのである。

三 宿命に抗う情義

さて如上の特徴を有する宿命論の導入により、『封神』に新たに付與された要素がある。それは宿命への抵抗である。

前節にて分析したせりふにおける宿命論は、主に闡教徒を中心とする周側勢力によつて頻繁に發せられている。なぜならそれは闡教徒が

『封神演義』に見える宿命と情義の衝突

殷周の王朝交替や封神を實行する上での據り所であり、妨害者と對峙した際に相手を説得するため説かれるものだからである。

しかしここで疑問が生じる。殷の臣下が王朝交替を阻止しようとするのは當然だが、仙道である截教徒は宿命を豫知しうる者でありながら、なぜ敢えてそれに逆らうのだろうか。

作中では、聞仲という人物の存在が、截教徒の宿命への反抗の契機となつてゐる。彼は殷の重臣であり、かつ截教徒でもある。前代の帝乙より紂王を託された太師である聞仲は、放埒な紂王を度々諫め、各地の反亂を鎮壓して殷の衰亡を食い止めようと奮闘する。また武王の動向に危機感を抱き、周に偵察軍を派遣するが、姜子牙率いる周軍にこれを破られてしまう。以後、周征伐軍を送る際に截教の同朋に協力を求めたことから、續々と截教徒が殷に加勢するようになり、對する姜子牙も苦境に陥るとやはり同朋の闡教徒や神々に救援を請う。こうして殷周革命は闡教對截教の仙術闘争に發展していく。

但し截教徒の參戰動機は同朋互助だけではない。物語が進むほどに殷は敗戦を重ね、截教徒の死者も増加する。それに従つて彼らの參戰動機は、同門同士の助け合いから闡教徒に對する敵意や怨恨へと變化していくのである。例えば、截教の火靈聖母を斃した闡教の廣成子に對し、他の截教徒が憎悪を露わにする場面がある。

龜靈聖母曰、「你把吾教門人打死、還到此處來賣精神、分明是欺
瞞吾教、顯你等豪強、情殊可恨。不要走、吾與火靈聖母報仇。」
仗劍砍來。

（龜靈聖母は「我が門徒を打ち殺し、その上こまでやつてきて能力をひ
けらかすなど、我らの教派を侮辱して、お前達の強さを見せつけようと
しているのは明らかだ、本當に憎らしい。逃げるなよ、火靈聖母の仇を

討つてやる」と言い、劍を手に斬りかかった。)(第七二回)

また次の例は、姜子牙と陸壓道人の呪術によつて殺された截教徒趙公明の妹達(雲霄・瓊霄・碧霄)が、子牙に敵意を向ける場面である。

雲霄曰、「姜子牙、吾居三仙島、是清閑之士、不管人間是非。只因你将吾兄趙公明用釘頭七箭書射死。他有何罪、你下此絕情、實爲可惡。……」子牙曰、「道友此言差矣。非是我等尋事作非、乃是令兄自取惹事。此是天數如此、終不可逃。……」瓊霄大怒曰、「既殺吾親兄、還借言天數、吾與你殺兄之仇、如何以巧言遮飾。不要走、吃吾一劍。」

(雲霄は言った。「姜子牙よ、私達は三仙島に住む清閑の士、俗世の争いには關わらぬ。だがお前は釘頭七箭書を用いて我が兄趙公明を射殺した。兄に何の罪があり、このような非情を行ったのか、何と憎らしい。」姜子牙は言った。「道友よ、それは違う。我らが故意に非道を行ったのではなく、そなたの兄が自ら招いたこと。天數でこのように決まっています。決して逃れられぬことだったのだ。」瓊霄は大いに怒り、言った。「我が兄を殺した上に、更に天數を騙るとは。お前は兄の仇、どうして言い逃れ出来ようか。逃げるなよ、我が劍を喰らえ。」)(第四九回)

このように、周側が冷靜に宿命を説くのに對し、殷側が感情的に反撥する場面は非常に多い。革命や封神に抗う者は、主にここに例示したような感情や、忠孝・報國等の倫理道德を動機として周側と對立する。本稿ではこれらを「情義」と呼びたい。

かかる殷側の感情描寫は、彼らが絶対不變の宿命になお抗う理由を情義によつて説明するものである。殷周の王朝交替と封神儀式の成功という結末が約束されている以上、いかなる戦闘も最終的には周側が勝利し、殷側が敗北することはもとより明白である。しかし、だか

らこそ敗北が宿命付けられている者には、それでも譲れない參戰動機を描く必要がある。勝利が約束されている周側に對し、殷側がなぜ、如何にして抗いたい宿命に敢えて立ち向かうのか、その心理的動機を仔細に描寫することで、雙方一步も引かぬ互角の對立關係が構築され、その後の戰鬥場面を盛り上げることが出来るのである。

從來の武王伐紂故事で描かれていたのは殷對周の戦いであつた。『封神』はそこに宿命論とその執行者たる神仙を導入し、宿命とこれに抵抗する者という新たな對立の構圖を作り上げた。周側が宿命論を多用し強調するほど、殷側の情義による抵抗は一層鮮明化し、これにより勝者の周側だけでなく、敗者である殷側の視點までもが克明に描き出されている。このように、宿命と情義は『封神』のストーリー展開を支え、物語に精彩を加える重要な役割を擔つていたのである。

四 宿命と情義の衝突

こうした特徴を最も鮮銳に表しているのが、殷郊・殷洪兄弟のエピソードである。本節ではこの分析を中心に、『封神』が描く宿命と情義、およびその衝突について更に考察を深めたい。

殷郊と殷洪は殷紂王の息子である。いずれも史書には登場しない架空の人物だが、『封神』が初めて創作したものでもない。先行する元代の『平話』と明末の小説『春秋列國志傳』(以下『志傳』と略稱)にも、殷郊^①という名の紂王の子が登場する。また明代に儒佛道の三教に關する通俗的な神佛事典として流布した『三教源流搜神大全』(以下『搜神大全』と略稱)には「太歳殷元帥」という項目があり、紂王の子殷郊が太歳神となる経緯が記されている。まずはこれらの先行作品と『封神』との差異を確認し、『封神』が行つた改變内容を明らかにしたい。

『平話』と『志傳』における殷郊の物語は骨子がおおよそ共通している。殷郊は紂王とその皇后姜氏の間に生まれた太子である。妲己の陰謀により紂王は姜皇后を殺害、殷郊をも抹殺しようとするが、彼は難を逃れ、母後の報仇の機会を狙って潜伏する。後に周武王による紂王征伐に加わり、数々の武功を挙げ、最終的には妲己や紂王を討ち取り復讐を果たす。『搜神大全』「太歳殷元帥」も相違点はあるものの、母の仇討ちを目的として武王伐紂に參與するという大枠のプロットは一致している。すなわち先行作品における殷郊の物語は、一國の太子が母親の仇として自ら父王を討つという壯絶な復讐譚なのである。

一方『封神』における殷兄弟の故事は次のとおりである。妲己の陰謀により、紂王は姜皇后を拷問、皇后は兄弟の眼前で死亡する。紂王は更に實子をも殺そうとするが、兄弟は處刑直前に闡教の仙人によって救出される。兄殷郊は廣成子、弟殷洪は赤精子に師事して仙道修行を積み、周軍の輔佐を命じられて人間世界に下る。しかし、最終的には兄弟とも殷軍に寝返り、師と他の仙道によって誅殺されてしまう。

『封神』は先行作品と比して大きな相違が二点ある。殷郊に加え弟の殷洪が登場する点、そして彼らが最終的に周でなく殷側に加勢し、周側の仙人によって抹殺されるという悲劇的結末に至る点である。本稿では特に後者の、結末の大轉換に着目したい。

先行作品の殷郊と『封神』の殷兄弟が迎える正反対の結末、その分岐点は彼らが殷と周のいずれに與するか決断を下す場面にある。まずは先行作品について見てみよう。

(殷郊)「吾欲要將招兵、滅無道之君、斬妲己、誅費仲、報親母之仇如何。」比干勸曰、「君父之間、豈行如此歹事。」太子曰、「父無愛子之心、子有孝父之意、叵耐妲己賤人教我娘苦死。」……太子曰、

『封神演義』に見える宿命と情義の衝突

「我往求兵將、必殺無道之君、不顧其父、難救妲己并費仲。」

(「私は兵を率いて無道の君を滅ぼし、妲己を斬り、費仲を誅殺して母の仇を討ちたいと思いますが、いかがでしょうか。」比干が「あなたと父君との間で、どうしてこのような凶事が行えましょう」と諫めると、太子(殷郊)は言った。「父に子を愛する心が無くとも、子には孝行心があります。しかし妲己のやつめが母を苦しめ殺したことはどうしても我慢なりません。」太子は言う。「私は兵を集め、必ずや無道の君を殺しましょう。それが父であろうとも、まして妲己と費仲は絶対に許せません。」)〔『平話』卷上〕

(姜文煥)又說太子曰、「殿下有君父之義、不可棄職、吾愿西投、求兵伐商。」殷郊曰、「我母因妲己而死、梅伯因我而亡。我亦同母舅西投借兵、除此賤婢、以消母恨。」

(姜文煥はまた太子に言った。「殿下には君父の義がありますから、職を棄てることは出来ません。私は西に行つて兵を集め、殷を討ちます。」殷郊は言った。「私の母は妲己に殺され、梅伯は私のために死んだ。私も叔父上と共に西に向かい、兵を集めてこの女を排除し、母の遺恨を晴らしたい。」)〔『志傳』卷一「姜子牙避紂隱磻溪」〕

『平話』では殷郊が父紂王への叛逆を決意するとき、紂王の伯父である比干が「君父之間」すなわち紂王と殷郊との間にある父子關係を指摘し、その倫理に悖ることへの懸念を呈する。しかし殷郊は妲己が實母を死に至らしめたことを理由に、必ず紂王を殺すと宣言する。

『志傳』においても殷郊の決断は同じである。姜皇后の弟姜文煥が叛逆を決意した際、彼は殷郊に「君父之義(父王への義)」があり、殷を捨てることは出来ないだろうと言うが、殷郊は姜文煥と共に西で兵を集め、母の恨みを晴らすと述べる。

このように、先行作品では第三者によつて紂王と殷郊の關係が指摘され、親子の間で争いあう、いわゆる父子相克に對する懸念が提起される。しかし殷郊はこれをもととせず、復讐の道を突き進む。そこに母の報仇と父子倫理とをめぐる殷郊の葛藤が描かれることはない。むしろ實の親子という極めて根源的かつ絶対的な關係性を提示した上で、殷郊がこれを否定することにより、彼の怒りと憎しみの根深さ、強さが描き出され、また殷を討伐する武將としての勇猛果敢さが表現されているのである。

あるいはこのような解釋も出來よう。紂王は妲己に唆され、妻を殺し、子をも亡き者にしようとした。殷郊の決斷は、親子の關係を修復不可能なまでに破綻させた紂王と妲己の惡逆非道を強調し、武王伐紂の正當性を主張する効果も有している。復讐に燃える殷郊を止める者が登場していることから、父子相克という倫理問題が意識されていたことは疑いない。だが殷郊の言動を通して、その問題を越える紂王と妲己の惡が示され、彼らを討伐する殷郊（及び武王）の正義が強調されているのである。

では『封神』はこの問題をどのように描いているのか。まず弟殷洪のケースを見る。第五九回、殷洪は師匠赤精子の命を受け、武王を輔佐するために下山するが、道中で申公豹という道士と出會い、父子が相戦う道理はないと喝破される。

（申公豹）「……紂王是你甚麼人。」洪曰、「是弟子之父。」道人大喝一聲曰、「世間豈有子助他人、反伐父親之理。」殷洪曰、「紂王無道、天下叛之。今以天之所順、行天之罰、天必順之。……」申公豹笑曰、「……你今助武王伐紂、倘有不測、一則宗廟被他人之所壞、社稷被他人之所有。你久後死於九泉之下、將何顏相見你始祖哉。」

殷洪被申公豹一篇言語說動其心、低首不語、默默無言。

（「紂王はお前の何だ。」殷洪が「私の父です」と言うと、道人（申公豹）は一喝した。「世の中に子が他人を助け、實の父を討つ道理があるものか。」殷洪は言う。「紂王は無道で、天下がこれに叛いています。いま天道に従い、天罰を下せば、天は必ず我らに従うでしょう。」申公豹は笑つて言った。

「お前が武王を助けて紂王を討ち、もしもものがあれば、宗廟が他人に破壊され、社稷は他人のものとなるのだ。後に死んであの世に行つたら、どういふ顔をして祖先に見えるのか。」殷洪は申公豹の言葉に心を動かされ、頭を垂れて黙り込んだ。」（第五九回）

母の慘死を目の当たりにした殷洪は、報仇を固く誓い、また天意にも適う紂王討伐に積極的であつた。しかし申公豹に父子相克の不條理や祖先と國土に對する責任を説かれて動搖する。先行作品の殷郊が一切迷わず復讐に邁進するのに對し、『封神』の殷洪は天意と倫理の間で大いに葛藤している。

殷洪はその後殷に寝返り、師の赤精子と對峙する。

（殷洪）「……殷洪乃紂王之子、怎的反助武王。古云、子不言父過。况敢從反叛而弑父哉。……」……赤精子曰、「武王乃是應運聖君、子牙是佐周名士。子何得逆天而行暴橫乎。」又把寶劍直砍來。殷洪又架劍、口稱、「老師、我與你有師生之情。你如今自失骨肉而動聲色、你我師生之情何在。……」

（「私殷洪は紂王の子です、どうしてあべこべに武王を助けられましようか。古より、子は父の過ちを言わず、と申します。まして反逆者に従い父を殺すことなど出來ましようか。」赤精子は「武王は天運に應じた聖君であり、子牙はその周を輔佐する名士である。どうしてお前が天に逆らひ横暴を振るえようか」と言い、寶劍を手にまつすぐ斬りかかつてきた。

殷洪は劍で受け止め、言った。「師匠、私とあなたの間には師弟の情があります。あなたはいま身内であることを無視して聲を荒げておられる、あなたと私の師弟の情はどこにいったのですか。」〔第六〇回〕

殷洪のせりふに見える「子不言父過」とは『論語』子路篇の「父爲子隱、子爲父隱（父は子の爲に隠し、子は父の爲に隠す）」を意識したものであろう。すなわち父子は互いの罪過を隠しあうべきだという、家族間の秩序を重視する儒家的倫理觀に基づくものである。肉親に關する倫理は單なる規範ではなく、情に根ざした道德と言へる。まして王の子は一國の將來を背負う立場にあるから、葛藤の末に父を擁護する側に回つた殷洪の決斷は充分に説得力を有する。これを「逆天」と切り捨てる赤精子に對し、殷洪は更に「師生之情」を訴えて師弟對決の回避を圖つている。まさに宿命論と情義とが眞つ向から衝突している場面である。

では兄殷郊はどのように描かれているだろうか。殷郊が下山する前に弟殷洪は處刑されていたが、彼はこれを知らぬまま人間世界に赴き、申公豹に出會う。申公豹は殷洪に説いた際と同様に周への加勢を批判するが、殷郊は天意に従うと答えて全く動じない。だが弟が殺されたと聞き、その報仇のため殷への變節を決意する。弟が動搖した天意か倫理かという葛藤を、兄は既に乗り越えていた。しかし、彼は更に弟の報仇という新たな問題に直面するのである。殷郊の苦惱は、師の廣成子と對決する以下の場面で存分に表現されている。

殷郊泣訴曰、「……弟子知吾父殘虐不仁、肆行無道、固得罪于天下。弟子不敢違天命。只吾幼弟又得何罪、竟將太極圖把他化作飛灰。他與你何讐、遭此慘死。此豈有仁心者所爲、此豈以德行仁之主。言之痛心刺骨。老師反欲我事讐、是誠何心。」殷郊言罷、放聲大

哭。廣成子曰、「……此事乃汝弟自取、實是天數。」殷郊曰、「……今兄存弟亡、實爲可慘。老師請回。俟弟子殺了姜尙以報弟仇、再議東征。」……廣成子又一劍劈來。殷郊曰、「老師何苦爲他人不顧自己天性、則老師所謂天道・人道、俱是矯強。」廣成子曰、「此是天數、你自不悔悟、違背師言、必有殺身之禍。」

（殷郊は涙ながらに訴えた。「父は殘虐不仁にして、ほしいままに無道を行つたため、天下に罪を得ました、それはわかつております。決して天命に逆らう氣はございません。しかし我が弟は何の罪を得たのか、太極圖で灰にされてしまいました。彼とあなた方に何の仇があつて、このよくな無惨な死に様となつたのでしょうか。これがどうして仁の心ある者の行いでしょうか、これがどうして徳を以て仁を行う君主と言へるのでしょうか。言葉にするのも甚だ苦しい。それを師匠はあべこべに私を仇に仕えさせようとなさる、一體どういふお考えなのでしょうか。」殷郊は言い終えると、聲をあげて泣いた。廣成子は言う。「これはお前の弟が自ら招いたことで、天數なのだ。」殷郊は言う。「弟が死んで兄が生きているなど、誠にむごいことです。師匠はどうぞお戻り下さい。私が姜尙を殺して弟の仇を討つてから、再度殷征伐についてご相談致します。」廣成子はまた一太刀をあげせる。殷郊は言った。「師匠はなぜ他人のためにご自分の天性を顧みないのですか。師匠の仰る天の道や人の道は、全部こじつけなのです。」廣成子は言った。「これも天數、お前は悔い改めず、師の言葉に背いた、必ずや身を滅ぼすであらう。」〔第六四回〕

殷郊は武王伐紂という宿命に逆らう意思のないことを明確に述べつつ、同時に弟の無惨な死に對する恨みを切々と語る。彼は姜子牙を弟の仇と認識しているため、周軍に従うことと弟の仇討ちとを兩立することが出来ない。宿命と情義との板挟みの末、情義を優先したのであ

る。この泣訴に對し、廣成子は「天數」の一點張りである。殷洪の場合同様、仙人である師の語る絶對的宿命と、弟子の情義とが激しく衝突している。

この場面で興味深いのは、殷郊の「老師何苦爲他人不顧自己天性、則老師所謂天道・人道、俱是矯強」というせりふである。まず、この「他人」は姜子牙を指す。殷郊は、廣成子が弟子の自分ではなく「他人」の姜子牙を守るため、「自己天性」を顧みないと言う。師は弟子を大切に思うという、自然な感情を蔑ろにしていると非難しているのである。更に仙人の言う「天道」や「人道」が「矯強（こじつけ、強引）」だと主張する。殷郊は、天や人の道理が人間の天性と一致するはずだと考え、情義と相容れぬ宿命を拒絶しているのである。

既述のとおり、宿命論は『封神』において物語を結末へと向かわせるための装置であり、これに絶對性を付與しうる神仙は、この装置を有効に機能させるため不可欠な存在である。殷側の同朋意識や怨恨等の情義も、宿命と互角に對立するために必要な描寫であり、その機能のみに着目すれば、これらは全て物語展開上の都合による設定と言える。だが殷兄弟の故事は、物語を順調に進めることよりも、むしろ紂王の子として生まれながら、父に母を殺され、父に命を狙われ、父と祖國を討つべく育てられた殷兄弟の顛末を悲劇的に描くことに主眼を置いてゐる。明らかに勝者よりも、敗者の悲哀や無念に焦点が當てられてゐると言えよう。先行作品では殷郊一人であつた紂王の息子が、『封神』では兄弟となつてゐることも、宿命と情義の對立をより鮮烈に描くための改變なのではないか。弟殷洪の追加により、兄殷郊に弟の報仇という新たな動機を與え、彼の宿命への抵抗を一層劇的なものにしてゐる。また兄弟がほぼ同じストーリーを二度繰り返すことで、

強大な宿命に對する情義の抵抗と失敗が、空虚感を伴つてより印象深く描寫されてゐる。

殷兄弟の故事を見ると、勝者が宿命を、敗者が情義をそれぞれ擔う對立構造が指摘できるように思われるが、本作中には單純な二項對立ではない、より複雑な葛藤を描く場面もある。先にも觸れた、趙公明の妹達のエピソードに見える宿命と情義の衝突は極めて印象的である。次の例は、第四九回、趙公明の死を聞き、姉妹が殷の陣營に至る場面である。

雲霄娘娘曰、「吾師有言、『截教門中不許下山。如下山者、封神榜上定是有名。』故此天數已定。吾兄不聽師言、故此難脫此厄。」瓊霄曰、「姐姐、你實是無情。不爲吾兄出力、故有此言。我姊妹三人就是封神榜上有名也罷、吾定去看吾兄骸骨、不負同胞。」……來到後營、三位娘娘見了棺木、揭開一看、見公明二目血水流津、心窩裏流血、不得不怒。瓊霄大叫一聲、幾乎氣倒。碧霄含怒曰、「姐姐不必着急。我們拿住他、也射他三箭、報此仇恨。」雲霄曰、「不管姜尙事、是野人陸壓、弄這樣邪術。一則也是吾兄數盡、二則邪術傾生、吾等只拿陸壓、也射他三箭、就完此恨。」

（雲霄は言つた。「我が師は、『截教門徒が下山することはならぬ。もし下山した者は、必ずや封神榜に名が載つてゐることだろう』と仰いました。だからこれは天數で決まつていたこと。兄様は師の言葉を聽かず、ゆえにこの不幸を逃れられなかつたのです。」瓊霄は言つた。「お姉様、あなたは本當に無情なお方。お兄様に協力しなかつたから、そんなことを言うのね。私達姉妹三人が封神榜に載つてゐるならそれまで、私は絶對に兄様の遺骸を見に行き、實の兄に背くことはしません。」後陣に至り、三姉妹が棺を開くと、趙公明の兩目から血が流れ、心臓からも流血してい

るのが見えた。こうなつては怒らずにはいられない。瓊霄は叫び聲をあげ、氣絶せんばかり。碧霄は怒氣を含んで雲霄に言った。「お姉様落ち着いて、奴らを描え、同じように三本の矢を射て、この恨みを晴らしましょう。」

雲霄は言う。「姜尙とは關係のないこと、放浪仙人の陸歴がこのような邪術を弄したのです。一つには兄様の命数が盡き、もう一つには邪術が命を奪つた。私達は陸歴だけを描え、奴にも三本矢を射れば、この恨みは晴らせます。」(第四九回)

長姉の雲霄は元來「周と戦うことは、師命と天意に逆らうもの」として、兄の死を悲しみつつも自業自得だと見なしていた。しかし二人の妹は彼女を「無情」と非難する。兄の無様な遺骸を目にしても、雲霄は極力周や闡教徒との衝突を避け、天意に逆らわぬよう努める。だがこの後、仇敵の陸歴道人に逃げられ、また妹達の激しい情動に巻き込まれて、姜子牙や闡教徒と對峙せざるを得なくなり、結局は彼女も宿命に抗する道を進んでいくことになる。この姉妹のエピソードでは、姉と妹達とがそれぞれ宿命と情義とを負つて衝突するだけでなく、長姉雲霄の内面における葛藤と、彼女が周囲や自己の心情に引きずられ、情義に傾いていく顛末を克明に描寫している。

情義によつて動搖するのは股側の人物だけではない。赤精子が殷洪を處刑する場面では、愛弟子を手に掛ける彼の苦悶が表現されている。赤精子見徒弟趕來、難免此厄、不覺眼中淚落、點頭嘆曰、「畜生、畜生。今日是你自取此苦。你死後休來怨我。」忙把太極圖一抖放開。

……赤精子尙有留戀之意、只見半空中慈航道人叫曰、「天命如此、豈敢有違。毋得悞了他進封神臺時辰。」赤精子含悲忍淚、只得將太極圖一抖、卷在一處。拎著半响、復一抖太極圖開了、一陣風、殷洪連人帶馬、化作飛灰去。

『封神演義』に見える宿命と情義の衝突

(赤精子は弟子が(姜子牙を)追つて來たのを見、この厄災を逃れられぬとわかり、思わず涙を流して領いた。「畜生、畜生。今日のことはお前が自らこの苦を招いたのだ。死んで私を恨むなよ。」そう言い、太極圖を開いた。赤精子はなお忍び難く思つたが、空中で慈航道人が「天命がこうであるのだ、どうして逆らえようか。彼が封神臺に進む時を違えてはならぬ」と言つた。赤精子は涙をこらえ、太極圖を巻き上げた。暫く掲げ、また開くと、一陣の風とともに、殷洪は人馬もろとも灰になつて飛び去つてしまつた。)(第六一回)

この前後にも、赤精子の動搖や苦惱が度々描かれている。彼は宿命に反する行動をとることこそないものの、その心情は明らかに情義に傾いている。宿命の忠實な執行者であるはずの闡教徒についても、内面における葛藤が描寫されている點は極めて興味深い。

宿命と情義の對立は、そもそも物語展開の都合上、殷周の對立に應じる形で設けられたと考えられる。しかし各場面の描寫は明らかに情義の側に重點が置かれており、宿命と情義の衝突を描き出すために、既存の殷周革命故事のプロットを改變することも厭わぬ作者の姿勢が窺える。殷周革命や封神を主軸としつつ、宿命に翻弄される人間の情義を描くことこそが、この小説のもう一つの趣向と言えるのではないだろうか。『封神』は、神仙妖怪の活躍する空想的エンターテインメントであると同時に、登場人物達の心の變を描き出す人間ドラマでもあるのである。

五 結論

『封神』の宿命論は、殷周革命や封神というこの小説の本筋を進行させ、決められた結末に物語を歸着させるための装置である。また

多數の神仙によつてこれに豫言性・絶對性が付與され、宿命論の如上の効果を十分に發揮させている。だが宿命論と神仙の導入は、こうした物語進行上の機能を有するだけでなく、情義による宿命への抵抗という新たな要素を加えており、個々の場面ではむしろ情義の側にこそ作者の丹誠の筆致を見ることが出来る。殷兄弟のエピソードはその好例である。先行作品で復讐と革命の英雄として描かれていた殷郊が、『封神』で悲劇の兄弟へと變貌したのは、宿命と情義の衝突をより劇的に描寫するためであろう。彼らが宿命に抗う様が鮮やかに描かれるほど、宿命の強大な力が強調され、その對立が物語を一層劇的なものにしていくのである。また、屬する勢力に關わらず、各人物が内面で激しく葛藤する描寫も散見される。作者はこうした衝突や葛藤を描くことにこそ心血を注いだのではないか。そのためにプロットや人物像を大膽に創作・改變し、殷周革命を生きた人々の宿命と情義をめぐるドラマを新たに作り上げたのである。

かかる描寫は、結果的に、人間性を超越したはずの神仙達までも、極めて人間的に描き出している。神仙妖怪の大活躍する神魔小説が、却つて人間の社會や心理を鏡の如く映し出しているのである。²³⁾

あるいは、この情義描寫による人間性の表現こそが、當時の小説讀者の關心を獲得したかもしれない。明末から清代の文學における重要なキーワードとして「情」や「眞」がある。李卓吾が『水滸傳』や『西廂記』といった通俗文學を高く評價したのは、それが「童心」すなわち人間ありのままの心情の發露であるからである。彼の思想が文學界の志向に與えた影響は甚大であつた。『封神』もこうした背景と無關係ではないだろう。²⁴⁾

『封神』が神仙妖怪の戦闘を特色とする娯樂小説であることは間違

いない。しかしこの作品が單なる荒唐無稽な空想小説として讀み捨てられ消え去ることなく、現代まで讀者を獲得し續けている要因の一つとして、この宿命と情義の衝突という側面を擧げることが出来るのではないだろうか。

注

- (1) 魯迅は『中國小説史略』第一八篇「明之神魔小説(下)」(中華書局、二〇一四年、一四七—一四八頁)において『封神』を次のように評している。「似志在於演史、而侈談神怪、什九虛造、實不過假商周之爭、自寫幻想、較『水滸』固失之架空、方『西遊』又遜其雄肆、故迄今未有以鼎足視之者也(目的は歴史を描くことにあるようだが、神怪を盛んに語り、そのほとんどは虚構で、實際は商周の争いに假託し、幻想を描いたに過ぎない。『水滸傳』と比較すると、確かに架空が缺點となり、『西遊記』には雄渾と奔放の點で劣る。故に、これまでこの二作品と『封神』とが鼎立するとみなした者はいない)。」
- (2) 二階堂善弘『封神演義の世界、中國の戦う神々』(大修館書店、一九九八年)、同「玄天上帝考」(『明清期における武神と神仙の發展』、關西大學出版部、二〇〇九年)、李亦輝「玄帝收魔故事與『封神演義』」(『首都師範大學學報(社會科學版)』二〇二二年第二期)参照。
- (3) 闡教と截教の由來については、胡文輝「『封神演義』的闡教與截教考」(『學術研究』一九九〇年第二期)、李建武「再考『封神演義』的闡教和截教」(『明清小説研究』二〇〇八年第四期)に考察がある。
- (4) 袁行霽編『中國文學史』(高等教育出版社、一九九九年)は、『封神』の缺點について次のように述べる。「書中流露了濃重的宿命論的觀點、把一切都歸結爲『成湯氣數已盡、周室天命當興』。又不管正義與非正義、

籠統地歌頌其忠君的精神。因而最後敵對雙方人物、乃至助紂爲虐的奸佞小人一齊都上了封神臺。這些與「女禍論」一起、都削弱了作品的積極意義（作品中には宿命論的觀點が濃厚に流れており、全てを「成湯の氣數已に盡き、周室天命當に興るべし」という考え方に歸結させている。また正義か非正義かに關わらず、漠然とその忠君精神を稱揚する。そのため、最終的には敵對する雙方の人物、ひいては紂王を助けて惡逆を行う奸佞の輩までもが、等しくみな封神臺に登るのである。これらと「女禍論」とが作品の良さを減じている）（一三七頁）。また二階堂善弘氏は「世俗の戦いに清淨虚無の仙人などが關わること」を「天命であるとして正當化している」と述べ、「このような天命觀は、『封神演義』に一貫して流れており、それが小説全體の印象に暗い影を投げかけている」と評する（『封神演義』の成立について、『東洋文化』復刊第六八號、無窮會、一九九二年）。

(5) 前掲注(2)二階堂氏著書のほか、瀧澤俊亮「封神傳と民族の傳統」（『東洋文學研究』第七號、早稻田大學東洋文學會、一九五九年）、章培恆「封神演義」的性質・時代和作者」（『獻疑集』、嶽麓書社、一九九三年）、田仲一成「中國鎮魂演劇研究」（東京大學出版會、二〇一六年）六七四—七四五頁等。なお李亦輝「順天與人倫的衝突——淺論『封神演義』中的殷郊・殷洪形象」（『成人教育』二〇〇九年第六期）が本稿と類する題目を掲げるが、該論文は「封神」の殷兄弟故事から宋明理學の人文肯定を讀み取るという結論に至るもので、本稿とは研究目的を異にする。このように朱子學や陽明學等の思想と關連させて「封神」を論じる研究もまた少なくない。

(6) 筆者の私見によれば、例えば「天命」は六九例、「天意」は五二例、「天命」は六五例、「氣數」は一二例を數える。但し同じ語彙でも情況や發話者によつてその性質が異なる（後述）。

『封神演義』に見える宿命と情義の衝突

(7) 本稿では國立公文書館藏『新刻鍾伯敬先生批評封神演義』を底本とし、『封神演義』（作家出版社、一九五六年）等の通行本を適宜參照した。

(8) 以上の例から、「封神」の特徴である神仙道士の活躍と宿命論との關係性が見てとれる。このことは本作がなぜかくも宿命論を多用するのかという問題を考える上でも重要である。そもそも宿命という概念自體は『三國志演義』や『水滸傳』等他の小説でも普遍的に見られるものである。しかし「封神」における宿命論の存在感はそれらの比ではない。また殷周の王朝交替が「天命」を受けたものであることから、武王伐紂故事は元來宿命觀念と結びつきやすい題材であったとも言える。だが注意すべきは、「封神」の宿命論が單に結末を豫言するだけでなく、多數の神仙の口を借り、革命が天意の反映であつて人爲ではない、と執拗に強調する點である。その要因として、革命思想が内包する君臣倫理との衝突を回避し、文王・武王像を理想化しようとしたことが考えられる。本來革命の主導者であるはずの文王・武王は、作中では君臣倫理に悖るとして紂王征伐に對し否定的態度を貫き、その度に姜子牙や仙人たちが宿命の不可避性を説いて革命を成功に導く。すなわち文王・武王の意思ではなく、天意とその執行者たる姜子牙や神仙によつて王朝交替が成し遂げられるのである。これも先行する武王伐紂故事とは全く異なる「封神」の重要な特徴である。神仙による宿命論の多用は、文王・武王を倫理的矛盾の無い聖君として描くことと、革命を完遂させ物語を終着點に導くことを兩立させているのである。なお、「封神」における文王・武王像改變の背景については、李亦輝・李秀萍「論『封神演義』中文王・武王形象的理學文化特徵」（『學術交流』二〇〇六年第一期）參照。

(9) 吉川幸次郎は「中國小説に於ける論證の興味」（『吉川幸次郎全集』第一卷、筑摩書房、一九六八年）において、中國の小説には、作中の出來事が發生した經緯を丹念に描くことで、その事件の必然性を「論證」す

る特徴があり、作者と讀者はそこに娛樂性を見出してたと述べている。『封神』が股側の情義を丹念に描寫するのも、宿命に抗う必然性を、情義によって「論證」しようとするものと考えられる。

- (10) 『封神』と先行する諸作品群との關係については、趙景深『封神演義』與『武王伐紂平話』（『中國小說叢考』、齊魯書社、一九八〇年）、柳存仁「元至治本全相武王伐紂平話明刊本列國志傳卷一與封神演義之關係」（『和風堂文集』、上海古籍出版社、一九九一年）に詳しい。

- (11) 『平話』では「殷交」と表記されるが、本稿では「殷郊」に統一する。
 (12) 二階堂善弘「哪吒太子考」、「太歲殷元帥考」（いずれも前掲注（2）『明清期における武神と神仙の發展』所收）参照。

- (13) 但し『志傳』の殷郊が直接手を下すのは妲己のみである。

- (14) 『封神』は戰没者を神に封ずる物語であるため、神となるべき人物は必ず途中で死なねばならない。かかる作品の性格上、太歲殷元帥という神格を持つ殷郊が、先行作品のように革命後まで生き残ることは出来ない。殷郊にまつわるエピソード改變の理由をこのように考えることも可能ではある。しかし、それならば殷郊は周軍へ歸順した後に戰死すれば良く、後述の如く宿命への抵抗や葛藤を敢えて累々描寫する必要も無いはずであり、且つ弟の殷洪が追加されることの説明もつかない。本稿では、殷郊を迎える結末の差異だけでなく、そこに至る過程が如何に描寫されているかを分析の對象とする。

- (15) 底本は『全相平話五種／三國志演義（寶翰樓本）』（瀧本弘之編『中國古典文學插畫集成』六、遊子館、二〇〇九年）を使用し、鍾兆華著『元刊全相平話五種校注』（巴蜀書社、一九九〇年）を適宜参照した。

- (16) 底本は徳田武編『對譯中國歷史小說選集』二（ゆまに書房、一九八三年）による國立公文書館藏『新鐫陳眉公先生批評春秋列國志傳』の影印を使用。

- (17) 近親者間で犯罪を隱匿する、いわゆる親屬容隱は、漢代以來法律上でも許容あるいは推奨され、明清律にも同居親族の罪を隱匿したものを處罰しない旨が明記されている。明清時代の人々にとって、親屬容隱は法律上も倫理上も當然遵守すべきものであった。中村茂夫「親屬容隱考」（『東洋史研究』四七卷四號、東洋史研究會、一九八九年）参照。

- (18) このせりふは、作品に貫徹する宿命論の強引さとその矛盾を作中人物が指摘したものと見ることも出来、興味深い。

- (19) 國立公文書館所藏の明版『新刻鍾伯敬先生批評封神演義』には多數の眉批や回末批評があり、明末當時の讀者の反應の一端を窺うことが出来る。例えば第六〇回、赤精子が殷洪に「你之助周、尙可延商家一脈。你若不聽吾言、這是大數已定、紂惡貫盈、而遭殃於子孫也（お前が周を輔佐すれば、殷の一脈を保つことが出来る。しかしもしお前が私の言葉を聽かないなら、これも運命、紂王の惡は滿ち、その災いは子孫に及ぶだろう）」と告げるせりふには「必竟牽強（所詮はこじつけだ）」との眉批がある。また第六四回到殷郊が廣成子に「此豈有仁心者所爲、此豈以德行之主」（既出）と訴える場面の眉批には「說得大是有理（誠にそのとおり）」とあり、その後廣成子が殷郊に斬りかかる場面では、殷郊の言葉に答えず劍を振るう廣成子の様子に「廣成子也無容置喙（廣成子も口を挟めない）」とコメントしている。闡教徒よりも股兄弟に同調する評語と見ることも可能であろう。なお書名には「鍾伯敬先生批評」とあるが、評語は明末文人の鍾惺（一五七四—一六二五）に假託したものと考えられる。偽評者と目される李雲翔については、拙稿「李雲翔の南京秦淮における交友と編著活動」（『中國文學論集』第四三號、九州大學中國文學會、二〇一四年）参照。

- (20) 『封神』における殷郊（および殷洪）の人物像やプロットの改變について、その理由を倫理道德の尊重に求める先行研究がある（前掲注

(2) 二階堂氏『封神演義の世界 中國の戦う神々』一三八頁、張暉「忠孝觀念與革命困境——『封神演義』中的忠孝與武王伐紂的合法性」、『復旦學報（社會科學版）』二〇〇八年第五期等）。こうした指摘も否定はできないが、倫理道徳は一面に過ぎず、本質は宿命と情義の衝突を描くことにあると筆者は考へる。

(21) 陸壓道人は周側に協力するが、闡教にも截教にも屬さない。故に「野人（流浪の人）」と呼ばれている。

(22) 加えて情義の多くが親族關係に基づくものであることも注目に値する。本稿に例示した以外にも、李靖・哪吒父子や崇侯虎・崇黑虎兄弟の對立が描かれ、その他、父子・母子・兄弟・姉妹・夫婦等の親族關係に着目したストーリーが數多く登場する（師弟關係も擬似的父子關係と言うことが出來よう）。小松謙氏は『三國志演義』や『水滸傳』が義兄弟という非血族の結束をこそ重視する要因として、これらの物語が義理の關係を重んじるアウトロー集團の中で發生・醸成されてきた可能性を指摘している（『三國』について——なぜこの時代が藝能の題材となるのか——、『四大奇書』の研究』、汲古書院、二〇一〇年）が、對照的に親族關係をクローズアップする『封神』は、このような江湖の物語と來源も受容層も全く異なると考へられる。このことは作者層・讀者層の問題に繋がるであろう。別稿にて考へたい。

(23) 魯迅の言に、「使神魔皆有人情、精魅亦通世故（神魔に人情を與え、妖怪も世事に通じている）」（前掲注（一）『中國小説史略』第一七篇「明之神魔小説（中）」、一四四頁）というものがある。これは『西遊記』の諧謔性について指摘したものだが、『封神』の神仙像や情義描寫も同様に現實の投影と見ることも出來よう。

(24) この問題は明清通俗小説及び文學史における『封神』の意義付けに關わり、更に考へを要する。今後の課題としたい。